

「植えない森」は、過程が大事 森≠林

一般財団法人 日本熊森協会

日本では、苗木を植えなくても森になるので、植えない森づくりをお勧めします。植えたほうが早く森になるのではないかとする人もいます。しかし、植えない森は、森になるまでの過程がすばらしく大事なのです。森も人間と同じように、赤ちゃん、幼児、青少年などいろいろな時代を経て大人の森になっていきます。（森の遷移）。一気に大人にならせようとしたら弊害が出ます。

裸地には、

- アカマツ、ススキ以外にその地域のイバラやタラノキなど、トゲ類の先駆植物が多く発芽する。
- 野草にチョウやハチなど昆虫がやってくる。
- ウサギやシカなど草食動物がやってくる。
- 昆虫の幼虫や成虫を餌とする野鳥がやってくる。
- 野鳥を餌とするタカやフクロウなど大型の野鳥がやってくる。
- 木イチゴなど先駆植物に赤や黄色の実がなる。
- 埋土していた森を構成する木の種が発芽して、成長を始める。
- 周辺にある木の種や野草の種が風で飛んでくる。
- 野鳥が種の入った糞を落としてまわり、木の種類を増やす。
- 野草や木々、野鳥の種類が増えていく。
- 先駆植物の棘類が成長して最終的に森を構成する木々をシカの食害から守り、森は本格的に成長を始める。
- 森の成長と共に、茅をはじめ草原植物が姿を消し、先駆植物は枯れて森を構成する木々の肥料となる。
- 森を構成する木々というのは、コナラ、サクラ、クヌギ、ケヤキ、モミジなどです。

森ができ上がると、最後にやってくるのがクマです。最高に豊かな森でないとクマは棲みません。

- 初期に生えてくる先駆植物や草原植物は最終的な森の構成員ではありませんが、途中には必要です。
- 原生林になると、野草も虫も野鳥も少なくなり、餌も減ってシカもあまり増えません。
- 原生林を皆伐すると、そこにひっそりと生きていた生き物たちが絶滅します。
- 無くした原生林はもう数百年間戻りません。原生林の成り立ちが「植えない森」です。
- 植えない森ができる過程において、たくさんの生き物たちが関わっていることが大切です。森づくりを急がないで欲しいのです。

林業のように、木を伐採後すぐに整地をして、農薬などを撒き、苗を植え、苗の成長に邪魔になる野草や先駆植物を刈っていくならば、野草も昆虫も野鳥も棲みかを失い、絶滅します。

「漁民の森」や「企業の森」づくりは広葉樹を植えています、木材になる数種類の木だけを植栽するので、棘類など先駆植物も野草もなくなり、限られた草や虫だけしか生き延びられません。

自然界には人間の頭では計り知れないだけ植物や昆虫が生息しています。苗木が広葉樹であっても、植林活動をするとするのは、必要な広葉樹の木材生産という林業をしているだけで、森造りではありません。

森は多種多様な動植物を生み出します。シカやイノシシを害獣視するのは森づくりではありません。シカやイノシシは、森の遷移と共に育ってきたのです。

イノシシは、土を掘り返してくれるので、良いことがあります。シカやイノシシは本来、森を守ります。自分の生息地を壊すような馬鹿なことはしません。

「森づくり」に人間の手は不要です。人間が生まれる前から森はありました。人間は森が完成した後に生まれてきたのです。日本列島に野生動物たちが棲みついたのは50万年前、人間が日本列島にやってきたのは2万年前と言われています。先住民を迫害するのは、生態学上からも倫理上からも間違っています。山に植林するのは、林業という視点からは意味がありますが、森づくりという観点からは、森破壊行為です。